

## サガマンダリンの着花状態と開花時期

小串尚子・夏秋道俊・大藪榮興・野方俊秀・\*柴山雅代・\*\*北島知子  
(佐賀県果樹試験場・\*佐賀県園芸課・\*\*三養基農業改良普及所)

Naoko OGUSHI, Michitoshi NATSUAKI, Eikou OHYABU, Toshihide NOGATA, Masayo SHIBAYAMA and Tomoko KITAJIMA :  
Flowering Type and Blooming Time of Sagamandarin Tangerin

新品種‘サガマンダリン’は興津早生の枝変わりである‘小西早生’と導入品種‘フェアチャイルド’との交雑種で、生育初期における温度反応が敏感でウンシュウミカンに比べ萌芽や開花期は早い。着花が多いことや新梢の発生本数が多く伸長も旺盛で開花時の養分競合等により、実止まりが不安定とされている。特に本種は着花状態に特徴があり、総状花序を有する樹も多く、着花状態と開花、結実等について調査した結果を報告する。

## 1. 調査方法

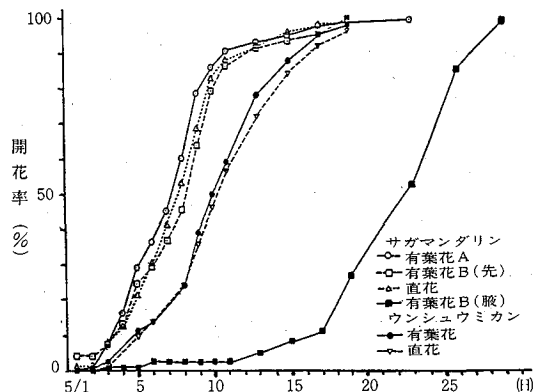
ウンシュウミカンを中間台とし1985年に高接ぎ、及び'84年にカラタチ台に接ぎ木したサガマンダリン、対象樹として尾張系温州の成木を供した。

植栽地は果試場内で高接ぎ樹は谷間状、苗木育成樹とウンシュウは山腹で前者との標高差はそれぞれ10m程度であった。開花時期は始期(10%開花)、盛期(50%開花)、終期(90%開花)とし、単生の有葉花(Aタイプ)、直花ならびに総状花序の有葉花(Bタイプ)の先端花と腋生花にわけ、1988年から3年間調査した。

## 2. 調査結果

1988年の高接ぎ樹の調査枝における着花状態は、有葉花Aタイプ及びBタイプの先端花は合わせて35%、直花は55%、Bタイプ腋生花の割合は約10%で、ウンシュウは有葉花35%、直花65%であった。開花始はサガマンダリン高接ぎ樹がウンシュウに比べ2日ほど早く、まず有葉花から咲き始めた。有葉花と直花の開花割合は開花始期～盛期ではほぼ1日遅れであったが、開花が進むにつれその開きは大きくなり、有葉花が咲き終わっても直花は咲き続け、この傾向はウンシュウも同様であった。なお、腋生花は極めて遅く、直花が終わる頃より咲き始めた。

1989年は冬季から春にかけての気温が極めて高く、開

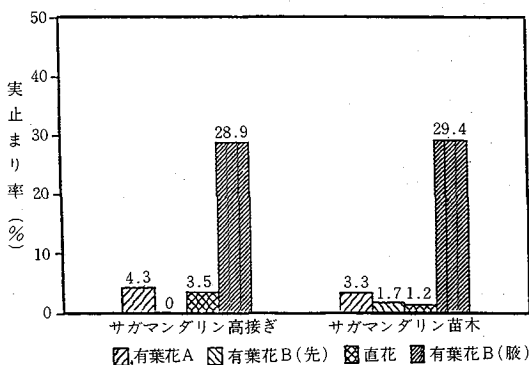


第1図 サガマンダリン高接ぎ樹と温州の開花時期 (1989年)

3日、盛期が5日、終期が9日で、高接ぎ樹はそれぞれ4日、8日、12日であったのに対し、ウンシュウは6日、11日、17日と遅かった。Aタイプが直花よりも僅かだが開花が早い傾向が見られた。これに対しBタイプの先端花は一部で早く咲き始め、特に樹勢の良い苗木育成樹ではAタイプの花よりも早い傾向さえ見られたが、高接ぎ樹では始期以降は直花との差がなく、盛期はむしろ遅れ気味であった。一方、Bタイプの腋生花はAタイプやBタイプの先端花、直花などが咲き終わるころより開花が始まり、これらの盛期には約二週間の違いが見られた。なお、実止まり率はBタイプの腋生花で明らかに高く、高接ぎ樹、苗木育成樹とも30%であったのに対し、Bタイプの先端花は腋生花の開花が進むにつれ落下し、高接ぎ樹では全部が落下、苗木育成樹も実止まりが悪かった。花の種類別にはBタイプの腋生花の割合が苗木育成樹では10%であったのに対し、高接ぎ樹ではやや少なく、その分だけ直花の量が多くなり70%以上もあった。

1990年はBタイプが比較的多く着生し、苗木育成樹では約20%、高接ぎ樹でも10%弱もみられ、直花はそれぞれ50%、60%であった。開花は苗木育成樹が明らかに早く、始期は5月9日、盛期が11日、高接ぎ樹はそれぞれ11日、13日であったのに対しウンシュウは13日、15日と遅かった。花の種類別にはウンシュウの開花時期は直花と有葉花の違いがなかったのに対し、サガマンダリンはBタイプ先端花が明らかに早く開花し、次いでAタイプ、直花で、腋生花は大きく遅れた。

以上、サガマンダリンは有葉花の割合が30~40%とウンシュウミカンの倍量近く見られ開花が早く、一方、総状花序の腋生花は開花が大きく遅れるが実止まり率は比較的高いことが判明した。



第2図 サガマンダリンの実止まりの割合 (1989年)